

茨城高等学校・中学校

校長室だより 2023年11月22日

寅さんの俳句

「わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯（うぶゆ）を使い、姓は車、名は寅次郎、人呼んでフーテンの寅と発します」。この気っぷのいい口上に聞き覚えはないでしょうか？鯉口シャツにラクダの腹巻、チェックの背広に雪駄履き、粋にかぶった中折れ帽の下には、お世辞にも二枚目とは言えない四角い顔と優しそうな小さな目。そう、昭和の大スター渥美清さんが演じる、映画『男はつらいよ』シリーズの主人公「寅さん」こと車寅次郎の自己紹介の挨拶の口上です。

近ごろ、『男はつらいよ』が、ちょっとしたマイブームになっています。きっかけは、Netflixです。数年前、我が家でもついにNetflixに登録しました。さあ、これで観たい映画が見放題だぞー、と意気込んだ筆者でしたが、後からわかったのですが、Netflixってどんな映画でも全部見られるわけじゃないのですね？（あたりまえか？）それでも、たくさんの映画やドラマが配信されており、それまでレンタルDVDとかでは絶対借りなかった映画にも視聴範囲が広がるようになりました。

筆者の世代にとっても、『男はつらいよ』シリーズがリアルで上映されていたのは10代～20代のころで、当時すでに、おじさん、おばさんの映画というイメージでした。まして、渥美清さんが亡くなって10年以上経った後に生まれた生徒諸君の中には、「オトコはつらいよ？それってジェンダー問題？トラさん？あー阪神ファンの人のこと？」という人も少なくないでしょう。本題に入る前に、少しでも映画の説明をしましょう。

映画『男はつらいよ』の第一作は1969年に公開されました。脚本・監督、山田洋次、主演、渥美清の黄金コンビによる映画は、その後シリーズ化され、昭和、平成を股にかけ、渥美清さんが亡くなるまで、約四半世紀にわたって48作を重ねる“お化け映画”となります。世界最長の映画シリーズ（作品数）としてギネスブックにも認定されているそうです。

寅さんは、東京の下町、葛飾柴又で生まれ育ちます。任侠（にんきょう）の世界にあこがれ渡世人（とせいにん）となった寅さんは、テキ屋を稼業として日本中を旅してまわります。テキ屋とは、縁日や盛り場など人通りの多いところで、店を持たず路上に商品を並べ、独特の口上で客を集めてものを売る商売です。三枚目を絵に描いたような寅さんが、旅先でさまざまな女性に恋をし、それを発端に、柴又で団子屋を営むおいちゃん（叔父）、おばちゃん（叔母）、妹のさくら、さくらの夫の博（ひろし）、隣の工場のタコ社長や寺の住職の御前様、寅さんの弟分の源公たちを巻き込んだ笑い涙の大騒動が繰り広げられる、というのが定番のストーリーです。

女性に惚れっぽく人情家の寅さんは、好きになった女性のためには「たとえ火の中、水の中」というタイプです。相手の女性も、親切にしてくれる寅さんに好意を抱くのですが、その好意は恋愛感情とは異なる好意です。それが分からない寅さんは、有頂天で、おいちゃん、おばちゃん、さくらや博に、女性とのエピソードをのろけ混じり、脚色混じりで語り聞かせます。聞かされる側は、その後の展開が容易に予想できるため、気が気ではありません。「おらあ、知らねえよ」と、おいちゃんのいつものつぶやきもれる場面です。

寅さんが恋をする女性には、大概すでに恋人がいたり、思いを寄せる男性がいたりします。それを知った寅さんは、女性の幸せを思って自ら身を引き、時には女性の恋が成就するよう手助けさえします。しかし不器用な寅さんがスマートにことを運べるはずもなく、しばしばトラブルが発生します。たまりかねたおいちゃんや、おばちゃんが寅さんに意見をしますが、素直に聞く寅さんではありません。いつか激しい口論となり、頭に血の上ったおいちゃんが「寅！おめえとは縁を切る！どこへでも出て行きやがれ！」と切れ、「おいちゃん、それを言っちゃあ、おしめえよ」と鞆一つ提げた寅さんは、あてもない旅へと出て行く、というのがいつものパターンです。

その定番化したストーリー、毎度おなじみの展開から「大いなるマンネリ」といわれた『男はつらいよ』ですが、何十年にもわたって人々に愛され続けるのには、理由があるはずで、中でも、貧しく名もない市井（しせい）の人々に向けられた山田洋次監督のヒューマニズムあふれるまなざしと、渥美さんが演じた、誰もが好きにならずにはいられない寅さんという人物像を除いて、『男はつらいよ』を語ることはできません。昭和を知る世代の人にとっては、寅さんといえば渥美清、渥美清といえば寅さんだったのです。

没後には国民栄誉賞も受賞した国民的大スター、渥美清という俳優は、徹底して私生活を見せない人だったようです。肺ガンでその68年の生涯を閉じた際にも、茶毘（だび）に付すまでは自分の死を世間に知らせるな、と家族に言い残したといわれています。渥美さんが俳句を趣味としていたことを知っていたのも、限られたごく少数の人たちだけでした。

『風天 渥美清のうた』（文春文庫）は、週刊誌の編集者でもあった著者の森英介氏が、生前の渥美さんが人知れず俳句を詠んでいたことを知り、散逸した渥美さんの俳句を探し求める、という内容です。俳句を作る際に使うペンネームを俳号といいます。渥美さんの俳号は「風天」でした。もちろん「フーテンの寅」からきています。

「ほとんど知られていなかった趣味の俳句。風天渥美清はその六十八年の生涯にいったいいくつかの俳句を作ったのか？いつどこで詠んでいたのか？」あるとき森氏は、雑誌「アエラ」の編集者たちが遊びで開いていた句会に、六十代のころの渥美さんが参加していた、という話を聞きます。早速アエラ句会の関係者に取材した森氏は、風天作の俳句45句に出会うことができました。しかし、渥美さんはアエラ句会以外の句会にも顔を出していた、との情報も耳に入ってきます。森氏は、日本各地を飛び回り、生前の渥美さんと親交のあった人々から話を聞き、世に知られていない風天俳句を発掘していくのです。

句会とは、俳句をたしなむ人たちが集まり、俳句を作ったり批評し合ったりする会のことです。参加者は、事前に決められた数の俳句を、作者名を書かずに提出します。提出さ

れた俳句は、筆跡が分からないよう清書された後、参加者に配られます。参加者はその中から、自分の作品以外で優れていると思う俳句を決められた数だけ選び、選句用紙に記入して提出します。こうして句ごとに点数をつけ、どの俳句が高得点かを競う遊びが句会です。また、選者は自分が選んだ句のどこが良かったのかを論評し、句会の参加者たちがそれに対して賛成、反対の意見を述べていく、というのが一般的な形です。

筆者が教員になった三十数年前、本校にも「茨高俳句会」なるものが存在していました。年齢も、担当する教科もまちまちの先生方が十数名所属していたと記憶しています。筆者は、どこでどういういきさつがあったのか全く覚えていませんが、気がついたら茨高俳句会の最年少会員として末席を汚すこととなっていました。月一で行われる句会にむけて毎回5句の俳句をひねり出すのは大変だったけれど、学校近くの定食屋の二階座敷で少々お酒など飲みながら、怖くて、普段は話しかけるのとはばかられる四十代、五十代の先輩教師の方々と俳句論議を交わすのは何とも楽しかった思い出があります。

『風天 渥美清のうた』には、はじめて「アエラ句会」に参加した渥美さんの様子が書かれています。「フーテンの寅さんと風天は、個性を全く異にしていた。寡黙。みんながビールを飲みながら、がやがややっている隣室の隅の暗がり、一人壁に向かって想を練っている。鬼気さえ感じられた。(…中略…)自分が有名人、芸能人として振る舞う、またそう扱われるのは嫌いだというのはすぐ分かった。句会が終わると、最寄りの居酒屋に繰り出すことになっていたが、風天はそれに加わらず、文字通り風のごとく、みごとに姿を消した」

森氏は粘り強く調査を進め、ついに1973年から1996年にかけて渥美さんが詠んだ俳句、223句を発見します。その中には、渥美さんの死の5ヶ月前の俳句も含まれていました。『風天 渥美清のうた』には、渥美さんが作った223句がすべて掲載されています。その全部を披露することはさすがに難しいので、いつものように筆者の好みと独断にもとづき、そのうちの何句かを紹介していきたいと思います。また、まことに僭越(せんえつ)ながら、句について自分なりの解釈や感想めいたものも書かせていただきます。天国の渥美さん、どうか怒らずに、寛大な心で受け止めてやっておくんない。

○好きだからつよくぶつけた雪合戦 / 1973年11月

子どもの頃、冬になると雪が降るのを心待ちにしていました。雪合戦、雪だるま、そり遊びなど、どうして雪の遊びはあんなに子ども心を熱くたぎらせるのでしょうか。

この句は、渥美さん46歳、アエラ句会で詠んだ俳句です。渥美さんの俳句を読んでまず気がつくのは、その平明さ、素直さです。辞書を引っ張り出して調べなければならないような言葉は、まず使われていません。この句なども読んですぐ情景が思い浮かびます。

雪の積もった校庭か、近所の空き地か、子どもたちが集まって雪合戦をしている。見ると、ほのかな思いを寄せているあの子ども雪合戦の仲間に入っている。好きなあの子どもだからこそ、つい意地悪く、雪のつぶてを強くぶつけたのだった。

今これを読んでいる男子生徒諸君の83%くらいは、「うんうん、わかる、わかる」と

うなずいているのではないのでしょうか？筆者も 小学生のころ、好きな女の子に対してわざと意地悪をしたり、乱暴な口をきいたり、という覚えがあります。それにしても小学生男子のアレは、いったいどういう心理なのでしょう？個人的な見解ですが、①その子を好きだということを、本人やまわりの友人に悟られないための浅はかなカモフラージュ、②あえて意地悪をすることで、その子の注意を引きたいという浅はかな計略、という二つの動機が入り交じっているのではないかと思います。

雪の玉を好きな女の子にぶつけた男の子は、幼い日の寅さんだったかもしれません。見栄っ張りの寅さんは、「女の子なんか嫌われたって、オレは平気だもんね」とまわりに示したかったのでしょう。それでいて女の子が泣いてしまったりしたら、これはちょっとやりすぎた、困ったなあ、という顔をしたに違いありません。

○コスモスひよろりふたおやもういない / 1973年8月

渥美さんの俳句には、五七五の定型にこだわらない自由律の作品も多く見受けられます。生前の渥美さんは、自由律の俳句を詠んだ尾崎放哉や種田山頭火といった俳人にあこがれ、映画やドラマで放哉や山頭火の役をやりたがっていたといえます。

コスモスがひよろりと長く茎を伸ばして、その先に白や薄紫の花が揺れている。その様子を眺めていると、ふと亡くなった両親のことが思い出された。もう自分には両親がいないのだ、ということに改めて感じた。

渥美さんは1928年、現在の東京都台東区に生まれました。父親は44歳、母親は36歳、当時としては遅い年齢で授かった子どもでした。そんな渥美さんは28歳で父を、42歳で母を亡くしています。

『風天 渥美清のうた』によれば、コスモスは渥美さんの母多津さんの好きな花でした。母を亡くして数年が経ち、秋風に揺れるコスモスを目にした渥美さんの胸に、ああもう自分には、この世に親と呼べる人は存在しないのだなあ、という感慨がしみじみと迫ってきたのでしょ

う。若くしてコメディアンを志し家を飛び出した渥美さんには、両親との音信が疎遠になっていた時期もあるようです。「豆まきもたねまきも家に居ずおそまきに泣く不孝者」という句があります。また、母親への思いを詠んだ「おふくろ見にきてるビリになりたくない白い靴」という俳句もあります。これは、おそらく運動会の際の思い出なのでしょう。

映画の寅さんは、両親は亡くなったという設定でしたが、シリーズ3作目で、実の母親が生きていたことが明らかになります。尊敬する「先生」に諭され、先生のお嬢さんに付き添われて母親に会いに出かけた寅さんですが、そこでもまた一騒動が勃発するのです。

○ゆうべの台風どこに居たちょうちよ / 1974年8月

渥美さんの俳句には、虫や小動物がたくさん登場します。げじげじ、蓑虫、ハエ、蝸牛、ひばり、天道虫、ひぐらし、芋虫など、223句のうちざっと数えても30句以上あります。その中でも筆者が素直にいいなあ、と感じるのがこの句です。

夜の間、激しい風雨をもたらした台風が去った翌朝、青く澄んだ秋空がひろがっている。

ふと見ると、その秋空の下に一匹の蝶がいる。このちっぽけな蝶は夕べの台風の間、いったいどこにいたのだろうか？

蝶はか弱いイメージの生物です。宙を舞う姿は優美ですが、乱暴に捕まえたりすると羽が折れたり傷ついたりしてしまいます。そんな蝶が、台風一過の青空のもと何事もなかったように澄まし顔でひらりひらりと舞っている。おいおい、ちょうちょ君、お前さんはいったい昨夜の台風の間どこでどう過ごしていたんだい？ともかくも無事でよかったなあ。この俳句からは、そんな優しいつづやきが聞こえてきます。

渥美さんの俳句に小動物が多く登場する背景には、弱いものやちっぽけなものに対する渥美さんの優しさ、共感があると思います。その中には、筆者の好きな句がたくさんあります。

げじげじにもあるうぬぼれ生きること
蓑虫こともなげにいきてるふう
芋虫のポトリと落ちて庭しずか
赤とんぼじっとしたまま明日どうする
蟹悪さしたように生き

海や川で蟹を捕まえたことはありますか？ちょっと動いてはピタッと静止し辺りをうかがう蟹の動きは、本当に何か悪事をしでかした人を連想させます。「悪さしたように動き」とか「悪さしたように居り」ではなく、「生き」と表現したのは、渥美さんのセンスだと思います。悪さがバレないように、おっかなびっくりの蟹のユーモラスな仕草は、どこか寅さんのイメージにもつながってくるようです。

○花冷えや我が内と外に君の居て / 1992年3月

渥美さんの句の中では珍しく、抽象的な雰囲気を持つ俳句です。

「花冷え」とは、桜の咲くころに一時的に寒さがぶり返すことをいいます。春の清冽な冷え込みの中、静かに「君」を想う作者がいます。「君」は作者の内にも外にも存在しています。外にいる「君」は、現実の「君」です。笑ったり、食べたり、怒ったり、日常の中で生きています。内なる「君」は、作者の思いが作り上げた、いわば虚像としての「君」です。それは鏡に映る姿のように、現実の「君」に限りなく近づき、しかし決して一致することはありません。それでも作者は、内なる「君」の虚像を追い続けずにいられないのです。

人を恋する、とはそういうことじゃないの？と、渥美さんが言っているような気がします。

寅さんにも恋に関する名言があります。シリーズ第10作『寅次郎夢枕』のセリフです。「飯を食う時も、ウンコをする時も、もうその人のことで頭がいっぱいよ。なんだかこう、胸の中が柔らかか〜くなるような気持ちでさ。ちょっとした音でも、例えば千里先で針が、ポトンと落ちて、わーっ！となるような、そんな優しい気持ちになって。いい、この人

渥美清さんは、本名を田所康夫といいます。田所康夫は俳優渥美清を演じ、渥美清は車寅次郎を演じました。「風天」という存在は、田所康夫、渥美清、車寅次郎とどのようにつながっているのでしょうか。しかし考えてみると、人は皆いくつもの顔を持ち、いくつもの自分を演じているのかもしれませんが。かくいう筆者だって、校長室で執務している自分と、仲間たちとテニスを楽しんでいる自分と、ソファに寝転がってミステリー本を読んでいる自分はほぼ別人格です。人間には多様な顔があり、多様な自分がいて、その多重性の中から詩や芸術は生まれてくるのだと思います。

2010年に刊行された『風天 渥美清のうた』（文春文庫）は、古き良き昭和の空気を感じさせる、ノスタルジックで、清新で、素敵な本でした。

最後に、渥美さんに負けず、筆者も30年ぶりに一句ひねってみます。

降る雪や昭和は遠くなりけり 克治

うーむ、どうもどこかで見たような…？

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。